

講演 東南アジア研究と私

SUZUKI, Yuji / 鈴木, 佑司

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / Review of law and political sciences

(巻 / Volume)

114

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

314(33)

(終了ページ / End Page)

270(77)

(発行年 / Year)

2017-03-07

東南アジア研究と私

鈴木佑司

*以下は2015年2月21日に開催された政治学コロキウムで発表したものを、小池康仁氏（法政大学政治学博士，指導教授鈴木佑司，現在沖縄県八重山郡与那国町にある与那国島歴史文化交流資料館事務局長）がテープ起こしをしてまとめた素稿を土台に，大幅に修正，加筆したものである。なお，同コロキウムは私の退職記念ということで，発表の後質疑応答がなされたが，ここでは紙面の都合で割愛させていただいたことをはじめにお断りしたい。

法政大学との縁，松下圭一先生との出会い

私がこの大学に入るきっかけになったのは松下圭一という先生にお会いしたことでした。確か，後にアメリカ政治学会の会長になったL・パイ（Lucian Pye）教授が東京で開催された世界政治学会（IPSA）に参加され，その後東京大学本郷キャンパスを訪問された際にお会いしたのが始まりでした。この東京での世界政治学会はアジア地域で初めて開かれたもので，日本のほとんどの政治学者が動員された大きな学会でした。その一つのパネルに前職の「マラヤ大学教授」として参加させていただきました。そのパネルの議長は確かアジア研究の大御所だったパイ先生で，パネリストにはコーネル大学のインドネシア研究で著名なB・アンダーソン教授，名前を失念してしまいましたがインドから参加されたガンジー研究者，そして当時筑波大学の教授となられていた進藤栄一さんがおられました。多分英語で発表ができるアジアの専門家が当時は少なく，アンダーソン教授とは既知であったことから選ばれたのだと思います。

それが縁で、本郷の会合に出させていただいたのだと思いますが、それが松下先生との出会いの場でもあったのです。会合の後、「お前法政に来ないか？」と仰って下さった。「え、どうしてですか？」とお聞きしたら、「お前、法政しか勤まらないと思う」。そして、自分の同期に、非常に面白い、しかしユニークな藤田省三っていう友人がいて、大学を辞めるだの、戻ってくるだの、本当に勝手気ままなことをやり、酔っぱらってばっかりっていう人がいて、その村上水軍の出身である藤田さんが鈴木君を是非呼んでほしいとかおっしゃったそうです。本当かどうか、本人に確かめたことがないので真偽のほどはどうでしょうか。その時にお話をした松下先生という方は、「お前何に関心を持っているんだ？」ということ聞かないで法政に来いという、まことに珍しい先生でした。松下先生が「この大学は帝国大学を否定した、珍しい大学である」と。「もう悪平等もいいところで、お互いが足を引っ張り合って好きなことができる大学、である」と。「民主主義もここまで愚民化すると面白い。あらゆる点で常識をひっくり返して、みんなが自由に、みんなが個人で、個々の学問の人生を全うして、静かに去るのが良い」と。松下先生は確かに、退職記念講演も無かったし、確かこういう送別会もなかったと思います。

考えてみると、私は国際政治学科の創設以来2人目の退任者です。最初は長谷川祐弘さん。UNDPに長年勤め、高い地位にまで登りつめられた方でした。前職は東チモールの国連PKO活動の代表、つまり国連事務総長代理でした。運転手つきの生活をされている人に、「運転手もつかないし、車はもちろんつきませんし、コピーって誰もやってくれない、何でも自分でやんなくてはいけない、エレベーターのボタンも自分で押さなくちゃいけない、エレベーターは自分で勝手に開きません」ということを申し上げたわけです。また、松下先生の表現を繰り返すように長谷川さんにも申し上げました。法政大学の特徴は
三
三
個人主義だ、と。それはどんなことを意味するのだろうか、今頃になってつくづく考えます。私がよく存じ上げている親しいシンガポール大学の政治学者は、「14冊本出したけど、誰も読んでくれないし、政府は一切関心持たないし、自

分は何のためにこんな本を書き、こんな学問をやって、こんな苦勞をしたんだろうか、嫌になったよ」っていう。最近は手ごたえが感じられる NGO 活動に精を出すようになったとおっしゃっています。必ずしも似たような心境にあるわけではないのですが、不特定多数を相手にするけれども、具体的な誰かに何かを伝えることを目的としてきたわけではない点では一致しています。大学とは、国境を越えて、個人の集まりだけれどほかの組織と異なり集団化をしない、個人はあくまでも個人であり、一人で学生にも、教員仲間にも、そして社会にも、大げさに言えば世界にも対峙する、そうした個人の集まりに過ぎない。逆に個人的に集積された知識は組織化されず、個々バラバラに成熟を遂げて、そのまま朽ち果てる、うまくいって思わぬところで継承されることもありうる。彼の言いたかったことは概略このようなものではなかったか。皮肉にも、「どんなところで転んで、どんなところで失敗して、どういう教訓を残したかっていうことを伝えることだ」と意見が一致したのを昨日のように思い出します。そこで、「なんで学者になったのだろうか」という学問との出会いのところからお話をさせて頂いて、何をどう考えてきたかを「回顧」してみたいと思います。時間があったら、国際政治学科がどう生まれ、どんな歩みを踏んできたかをお話しできたらと考えます。

アジアへの関心

実は私がアジア研究に関心を持つ機会をあたえてくださったのは、法学部の先生であるより経済学部の経済史学の先生だったんです。大塚久雄先生でした。定年退職に近い時期でしたが、先生の西欧経済史は本当に面白く、マリリン・モンローはなぜ裸で死んだかという、びっくりするタイトルで、しかしそこには資本主義の、その形成の、非常に大きな秘密があるっていう、信じられない話をされていました。大塚先生の授業を聞いている中で、川田侃先生という後々非常に深く関係を持つようになった、もう亡くなられましたけど、その先

生の名前が時折出てきました。そして、川田先生の授業にも出るようになりました。川田先生は矢内原忠雄の後を継いだ人でした。そして、矢内原忠雄の植民地研究に大変関心を持つようになりました。その時何気なく入手した大部の本が、G・ミュルダールの「アジアのドラマ」でした。これが、多分、私の生涯にとって、一番「重たい」出会いの本だったと思います。

もう一つ、駒場時代には一顧すらしなかったのですが、アジア研究や植民地研究に興味を持つようになると、駒場の授業にも面白いものがあるのに気づきました。全くまだ関心がない時期に、インドネシア政治の授業を早稲田の増田与先生がしていました。この増田先生、性格的に本当にチンピラで、ヤクザで、なんと言ったらいいんでしょうか、学問的にも本当にいい加減な先生だったと思うんですが、一つだけ衝撃的なことを私たちに教えてくれた。現地を知らないでインドネシアを語ることはあってはいけない、と。その言葉ができないでインドネシアの政治なんかわかるはずがない、インドネシアの人たちの気持ち解らないでインドネシアなんかわかるはずがない、ということばかり言っておられる先生でした。実はその先生の対極にあったのが、文学部の学部長になっておられた山本達郎先生というベトナム史研究では著名な先生であり、その後釜に座られた南方史、東南アジアの歴史、特にインドネシア、とりわけジャワの歴史の専門家であった永積昭先生でした。いずれの先生も典雅優麗、人品骨柄に秀で、まことに紳士。永積先生は昭和天皇の皇太子時代の東宮侍従長の息子さん、先生の奥様は哲学者で京大教授の三木清の御嬢さん、「平戸商館日記」を翻訳されたオランダ語の大家、永積洋子さんです。永積昭先生はコーネル大学に留学され、オランダの資料を駆使した研究で有名な先生でした。インドネシアで民族主義運動といわれるにふさわしい運動が20世紀初頭にジャワ、中部ジャワで起こります。この研究が彼の研究でした。ブディ・ウトモ（ジャワ語で「高貴なる貢献」）と言われた運動の担い手は、ジャワ貴族に生まれた人、特に女性を中心だったと述べられています。やがて東京外語大に就職され、何年かして東大に移られて、初めて本郷で南方史というよりインドネシ

ア史、いやより直截にはジャワ史の講義をおやりになったときに、登録したただ一人の学生が私でした。オランダ語も勉強しなければということで、オランダ語を教えてもいただけるという、何とも幸せな時期でした。この後私は、先生の勧めもあってインドネシア研究に進み、オーストラリアに留学することになるのですが、永積昭先生に教えてもらうということが続きました。先生は早死にされてしまいましたけど、本当に色々と人生の面倒まで見て頂いた記憶があります。で、その先生がただ一つだけ、「評価していい」とおっしゃったのが、元インドネシア日本軍政の担い手であった西島重忠氏を中心とする早稲田大学の研究グループが行った「日本軍政の研究」と題する研究でした。そして、これが私の大学院での研究テーマにもなりました。「自分たちは正しいことをやったんだ」というのがその本の主張なのですが、でも、「本当に正しかったんだろうか」「相手はどう考えていたんだろうか」ということに関心を持つようになったわけです。「相手の視点から、我々を見る」ということがどんなに大切かと考えるようになったきっかけでした。しかし、それにはインドネシア語ができない、そもそもインドネシアの歴史を知らない。なんとしたらよいか迷う日々でした。多分大学を卒業して就職する前に、何とかしてその答えを見出したいと思うようになり、あまり深く考えずに大学院、そして留学という進路を考えるようになっていきました。

坂本先生との出会い

しかし、こういう疑問に重要なヒントをくれる授業に出会いました。こういう視座の展開というのか、まあ、本当に見事に、きれいに整理できる人が世の中にいるのかという授業をやっていた人が、坂本義和先生でした。まことに、三〇恐れ入りました。坂本先生の授業に出たことが、いろいろ迷った末に、国際政治を勉強してみたいという風に思った理由です。もっとも、坂本先生の専門とは違う第三世界の研究に、強い関心を持つようになったのは、上の二つを足せ

ば、すぐおわかりかと思います。

とはいえ、こうした興味も、当時の東大では全共闘運動が燃え盛り、大学の在り方を問うような深刻な事態の前では一旦停止、ないしは運動の片手間に追いやられ、遅々として進みませんでした。そんな折、永積先生からいただいたオーストラリアの先生の論文がとても衝撃的でした。後々私の恩師になる、H・フェイスという、オーストラリア国立大学（のちにモナッシュ大学に移られる）の研究者の「世界像の変化とインドネシアの独立」という国際政治学の機関誌であった World Politics に掲載された論文でした。これを読んで坂本先生にお見せして、「この人のところで勉強してみたい」と伝えました。当時の坂本先生はそれから2年間国連本部での研修機関に出向されることが決まっていた。坂本先生は手紙を書いてくれました。H・フェイス先生、当時サバティカルの時期だったのでアメリカのイエール大で研究留学されていた。この人のところで勉強するという準備をしようと思ったのですが、直ちにそういう風にならなかった。当時私自身が東大の問題児だったものですから、簡単には外に出られない。フェイス先生に手紙を出して「先生のを少し読みたいので送って下さい」とお願いしたら、彼の主著を含む長いリスト送られてきました。その中の一つがインドネシア政治の名著と言われる、Decline of Indonesian Constitutional Democracy です。「インドネシア憲政の崩壊過程」という、第一次的資料をよく集めて、細かく分析したもので、こんな本を書く人が良く世の中にいるものだと感じました。世界像の議論をしている人が、まことに本格的な歴史学的手法に忠実に何が起きたのかをできる限り近い形で再現をした書物でした。今もってこの本を超える作品はインドネシアの研究者によるものでもないといわれるほど完成度が高い。この本を読んだときに、先の増田先生と比較してはいけないのですけども、あまりにも日本と、世界のレベルの違いというか、愕然としました。なんとか先生のところで勉強させてくれと頼みました。そしたら、その先生は、「僕のとこに来るよりは、当時、エール大で、H・ベンダという、日本軍政を研究し、日本語もわかる、非常に優れ

たアメリカの研究者がいるのでそこに行きなさい」と。紹介状を書いてくださいました。当時、彼はシンガポールにある東南アジア研究所というところに、客員研究員兼所長として赴任されておりました。そこで、手紙を出して、シンガポールに行けば会って頂けるってということがわかり、早速その準備にとりかかったところ、その先生は突然の心臓発作で客死を致しました。それで結局、フェイス先生に報告をしましたところ、「僕は来年オーストラリアに戻る」とのこと。ここから、思いもしなかったオーストラリア留学を実行に移すことにしたわけです。

フェイス先生とインドネシア

フェイス先生は、私がオーストラリアに行く前に、インドネシアに寄って行きなさいと、十何通と紹介状を書いてくださいました。その中でもとりわけ後々、自分の人生にとって、欠かすことができないような重要な人達に会わせて頂きました。そのうち4人だけを紹介したいと思います。その一人、スジャトモコさんは、独立運動時代にインドネシア大学医学部学生で、初代総理大臣（スータン・シャフリール）の義弟だった人です。独立運動に身を投げて、医者にならずに、独立達成後は初代総理大臣の秘書官として、そして後にアメリカ大使としての華麗な経歴を積んだ人です。国連大学の第二代学長になられた方でもあります。切れ者の方です。名前はスジャトモコといいますけど、ジャワ人です。「モコ」という語尾が名前についているのは、7つ貴族の階級がジャワにあったのですが、そのうちの下から2つ目に匹敵するっていられています。スジャトモコさんにお目にかかったときは、本当にびっくり仰天しました。こういう、すごいインテリがいて、会ってくれたこと自体も感謝感激ですけど、日本のことをものすごくよくご存じで、「日本植民地支配時代は敵だったけど、そこから学ぶことが一番多かった」と言われたときは、どう答えていいのか、とまどった記憶があります。

二人目は、終生私の「人生の恩師」になった、ルスラン・アブドゥルガニというスカルノ大統領の右腕と言われた政治家でした。この方も、出身は貴族として、東ジャワのスラバヤ出身の方です。この方はスカルノ大統領の演説原稿を書いた、ゴーストライター。さらに初代情報大臣、それから1955年にバンドンで開かれたアジア・アフリカ会議の事務局長を務められ、後に外務大臣を経験され、総理大臣も務められ、そして政界を引退してからも、国連大使、さらには大統領特別顧問などを務められた、華麗な経歴の持ち主です。ご自宅は初代大統領スカルノが独立宣言時に住んでいた私邸を払い下げてもらった立派なものでした。私にはどういう訳か「馬が合う」とおっしゃって、いろいろお教えいただきました。88歳で亡くなるまで、約30年近く、本当によく、お付き合いをして頂きました。坂本先生にも、何度も会って頂いたことがあります。

三人目と四人目は、まずユヲノ・スダルソノ博士。私がインドネシア大学に客員講師として着任したときの政治学科の主任でした。イギリスのハル大学で博士号をとられた政治学者で、学科主任、つまり私の上司でした。後々、学部長をやられ、それから国防大臣をやられるという、政治家としても大変成長された人です。最近、心臓発作で二度倒れられて、静養を余儀なくされているようです。もう一人がユヲノ博士の親友と言われた、長ったらしい名前ですけどドロジャトン・クンチョロヤクティ博士。ヤクティという語尾がついている名前は、さっきの7つのジャワの貴族の一番下に匹敵する地位を表します。さらに、ヤクティと読むのは、ジャワ人であって、ジャワ以外のところの貴族の地位を占めた人。まあ防人というか出先機関の長みたいな地位です。従ってジャワから、スンダ地域、つまり西ジャワに、派遣されたそこの地方長官に就いた人の末裔ということになります。私の今最も親しい友人でもあります。日本から勲二等までもらった方です。UCバークレー校出身で経済の専門家、特に地方経済の専門家です。ユヲノさんとともに後に田中角栄首相訪問時に起こった反日暴動の首謀者ないしはその周辺にいたとして逮捕・投獄されますが、スハ

ルト時代の後半になるとお二人とも大使・閣僚に近い地位にのぼり、スハルト以降は防衛大臣、経済大臣として活躍されるようになった方々です。この方たちは、とにかく語学も良くできるけど海外経験も豊かです。ユヲノ・スダルソノ博士のお父さんは初代国務大臣で初代インド大使だったので、生まれたところがインド。育ててくれたおばさんが、実は彼の後々の上司になる、インドネシア大学の初代の女性政治学部長になったメリアム・ブディアルジョ教授。実は一番目に触れたスジャトモコさんの妹に当たる方でもあります。華麗な一族です。他方、ドロジャトンはアメリカ大使としてワシントンで活躍をした人です。縁があって、実はこの二人からはそれぞれ一人の大学院生を法政で引き受け、二人とも博士号を取得させました。

話を元に戻して、わずか一カ月間しか、オーストラリア行く前にインドネシアにいなかったんですけど、こういう人達にお目にかかれました。ますます「インドネシアで勉強しよう」「インドネシアのことについてもやろう」という気持ちが固まっていきました。

オーストラリア留学と研究テーマ

オーストラリアに着き、まずシドニー大学で留学生のための語学研修を6週間受けることになりました。その間、シドニー大学やニューサウスウェールズ大学でインドネシア研究をしている若手の研究者にも会うようにとフェイス教授には言われていました。その中には終生付き合うこととなった友人（A・スミス博士、シドニー大学）が含まれます。無事語学研修を修了して、シドニーからキャンベラに移り、そこでも先生に言われたように私の留学のいわば「保証人」となった二人の研究者に会うことになりました。一人は後にオーストラリアの日本経済研究の第一人者となったP・ドライスデール博士（一橋大学留学）、もう一人は後にオックスフォード大学での日本政治の研究で著名となる

J・アーサー・ストックウィン博士（東大留学）です。前者のドライスデール博士は私と「馬が会う」というのか、今日に至るまで親しくさせていただいています。キャンベラの彼の自宅にはよく泊めていただきましたし、実家のご両親の家にも招かれたことがありました。その彼の後輩にあたるR・ゴート博士は私とほぼ同年齢で、インドネシア経済の専門家でしたので、いろいろと学ぶことができました。

後者のストックウィン先生は、2005年に国際政治学科を設立する際に助言をいただきオックスフォード大学での研修プログラム（法政オックスフォード研修プログラム、HOP）を立ち上げる際に協力いただきました。以来、先生は現役を引退された後も協力を下さり、2015年までユニバーシティ・コレッジでの特別講義を続けていただきましたし、2008年に開設した大学院国際政治学専攻の特別講師を務めてくださいました。こうして日本を出て3か月後、目的地のメルボルンにあるモナッシュ大学に辿り着きました。今でも覚えています。鉄道でキャンベラからメルボルンに来るように言われ、到着駅で待っていると、『鉄腕アトム』という漫画に出てくる「お茶の水博士」そっくりの先生が出迎えてくださいました。最初の挨拶はインドネシア語でした。そして最初に言われたのは、「インドネシア語、オランダ語、英語、地域研究の四つをやりなさい」、だったように思います。会った日から、インドネシア語しか喋ってくれません。文通は全部英語でしたが、「ここに来たらインドネシア語だ」。永積先生から少しは勉強していましたが、永積先生のインドネシア語は「文語調」ですので、フェイス先生の流暢なインドネシア語についていくのは一苦労でした。こうして、インドネシア語とオランダ語と英語と地域研究をやらされるという、日々が始まりました。

実際、どういうテーマで研究をするかという点については、フェイス先生と本当に長い討論と議論を重ねました。私は植民地解放運動に、日本軍政はどんな役割を果たしのだろうか、プラス面も、マイナス面も含めてやってみたい、

と聞いていました。他方、先生の方は先に掲げた私の「保証人」の二人から話を聞いていたらしく、私が日本の左翼運動にかかわっていた点に関心を持ったらしく、別のテーマに取り組んだらどうかと言われました。当時の欧米のアジア研究者にとってわかりにくかった点と関係します。具体的には、1920年代からインドネシアでも左翼（特に1920年に結成された共産党）とほぼ同じ時期に結成されたナショナリスト（国民党）との対立と合従連衡との繰り返しが生じるようになります。そしてこのような1920年代の国共合作型のリーダーとしては無論初代大統領になるスカルノがいます。スカルノ研究もたくさんされてきました。しかし、左翼の側の研究はほとんどなく、それが関心を呼ぶようになるのは独立後の1950年代後半から1960年代半ば、つまりスカルノと組んだインドネシア共産党が強大な勢力となる時代まで待たねばなりません。この共産党とスカルノがいわば国共合作を遂げ、一大政治勢力であった軍と激しい対立をするようになる歴史的経験を克明に跡付けたのがフェイス先生の業績でした。しかし、この国共合作型の政治のモデルはすでに1920年代にあったのではないかと、それも当時、広東で、インドネシア共産党の支部を運営していたタン・マラカというスマトラ出身の共産党リーダーがそれではないかと興味深い示唆をしてくれました。この第2代インドネシア共産党の委員長長について調べてみないかと誘われました。

興味を持ち、可能な限りでこの人について調べてみました。オランダ留学組である西スマトラ（ミナンカバウ）の上流階級出身の方です。小さい頃からオランダ語で教育を受け、後にオランダに留学すると、直ちに当時のヨーロッパを席卷していた社会主義思想に引き寄せられます。ロシア革命後のソ連主導で組織された「第三インター」の活動にも関わるようになった人物です。しかし、多くの留学組がそうであったように、留学を終えて帰国し、故郷のプランテーションの経営に加わる選択をします。他方で、植民地支配体制の問題に「根本的」な解決、つまり植民地体制の打倒と国民国家の建設、それも「暴力革命」で実現するという考え方を一層固めていくこととなります。そして、1926年

には共産党の蜂起が実行されました。むろん無残な失敗に終わります。この苦い経験から、共産党の指導の下に国共合作を求めるという考え方を強く持つようになったといわれています。率直にこの人物に関心を持ちましたし、興味もわきました。そこから、彼の独立前の活動、特に日本軍による占領時代（1942年—1945年）の彼の活動を追いかける作業を始めました。日本による東南アジアの軍事占領がそれ以降の民族独立運動にどんな影響を与えたのか、日本の資料を中心に調べました。とりわけ、フェイス先生の示唆もあって、日本軍政に協力した民族運動のリーダーではなく、日本軍政に抵抗した人々に焦点を当てました。小さい英語の論文を書いて発表しました。それにある通り、タン・マラカの名前はほとんど出てきません。反日運動は非合法化された共産党などの政党ではなく、むしろ土着化した保守的ともいえるイスラム教団が中心でした。なぜなのか。そこからそれ以前、つまりオランダ支配時代後期（1930年代以降）にインドネシア共産党やその分派の運動はどんな活動をしていたのかを調べる必要を感じるに至りました。思わぬ方向に研究テーマが変化していったのです。

インドネシアへの長い道

こうして1年ほど過ぎたころ、モナッシュ大学からインドネシアでの現地調査の許可が下りました。インドネシア語、オランダ語の学習もある程度まで進んだこと、オーストラリア連邦政府の奨学金の選考に勝ち残ったことなどが背景にあります。留学先と言ってもインドネシア大学社会科学・政治学部（当時は政治学科）での非常勤講師を務めるという条件で、受け入れが認められました。その長をしていたのが、オーストラリアに行く途中でお目にかかったユヲノ博士でした。しかし、当時インドネシアへの留学はとても狭い門でした。というより、スハルト政権が成立して間もないころであり、インドネシア政府は外国人研究者へのビザ発給に厳格な審査をするように義務付けたのです。と

りわけ、同政権に対する批判的な研究をしていたアメリカのコーネル大学とオーストラリアのモナッシュ大学には厳しい審査がされるという噂でした。モナッシュ大学は、当時のインドネシア政府から「赤い大学」として睨まれているともいわれていました。その背景は以下のような事情があったと思います。

周知のようにインドネシアでは、1965年にいわゆる9.30事件という、共産党の暴動といわれる、大きな政治事件が勃発しました。スハルト少将を除くほとんどの高級軍人が暗殺されるという一大事件が起こったのです。いち早く事態を掌握したのはスハルト将軍であり、スカルノ大統領はその暴動の背景にありということで失脚します。軍と共産党の対立は全国化し、100万人と言われる被害を出したと言われます。この一大政治事件については、現在もお論争中ですが、最初の本格的報告書と言われるのが、コーネル大学の研究者を中心として執筆された「コーネルペーパー」でした。この報告書の核心部分は、スカルノ大統領、非共産国家で最大の勢力を誇ったインドネシア共産党、そしてそれと正面から対立するインドネシア国軍の緊張状態にあったことでした。「指導される民主主義」という強権体制を敷いたスカルノ大統領は、軍と共産党という二大政治勢力の微妙なバランスの上であって、軍の影響力が増すにつれ、共産党への傾斜を強めるという傾向にありました。こうした緊張状態の中で、軍の一部（特に空軍）が共産党の一部と連携して反共勢力、特に軍部の中枢勢力を排除したというのが事件の核心だとしたのです。そして、このクーデターに素早い対応と権力掌握、そして共産党の非合法化、スカルノ大統領の失脚へと突き進んだ反クーデターの中心人物がスハルト将軍であったというものでした。この研究チームにはモナッシュ大学の先生方も入っており、取りまとめをした中心的な研究者がコーネル大学のB・アンダーソン教授でした。

他方、スハルト将軍の権力掌握と新しい体制（新体制と呼ばれた）作りに、軍と並んで大きな役割を果たしたのが後に「パークレーマフィア」と呼ばれるようになるインドネシア大学の経済学者たちでした。むろん彼らの他にも、軍

と共産党の微妙なバランスの上に一種の独裁体制を築いたスカルノ政治への批判的な研究者が大勢いました。そしてこうした反共、反スカルノの系統に属する学者たちは、多くはアメリカへの留学組ですが、スハルト政権の「新秩序」形成に大きな役割を果たすこととなります。まさにそうした研究者集団が中核部分を形成する学術振興組織（LIPI：インドネシア学術研究機構）が研究における指導的役割を担うようになり、しかも外国の学術研究に関する審査機関（研究ビザの供与の決定に重要な役割を果たす）でもあったわけです。インドネシアに渡った後で知り合うことになる多くの研究者たちから直接教えられたことですが、彼らの多くはコーネル大やモナッシュ大学におけるスハルト体制への批判的研究に対して強い疑念を持っていることが多く、こうした背景から、私だけではなくモナッシュの研究者へのビザがなかなか下りないことになったと思われまふ。フェイス先生の門下生だけではなく、むしろ保守的ともいえた歴史学専門のジェミー・マッキー教授指導の下にあったマレーシアからの留学生も、そして私も1年余の間待たされました。私の場合、フェイス先生と十分に相談して、上記のタン・マラカの研究、それも1930年代のそれであっても、共産主義運動の研究ですから、まずビザは下りないと考え、日本軍政下の反日暴動、特にイスラム教徒が主導的役割を果たした西ジャワの暴動の調査をテーマにビザ申請をしました。実は、タン・マラカが1945年8月の独立宣言以降インドネシア政治に再登場するのは西ジャワを中心とするイスラム運動と連携する共産主義運動だったからでもあります。

とにかくひたすら待つしかありません。インドネシア語、オランダ語の勉強の他に、インドネシアに関する研究書を系統的に読み、さらに国際政治学の研究書を手あたり次第読みました。その中には「構造帝国主義論」についてのJ・ガルトゥングや、依存論のG・フランクらの本も含まれていました。たまたま当時のモナッシュ大学にはこの系統の学者がいろいろと訪問してきました。各国から訪問してくる学者、特に構造論に近い立場の学者たちが沢山いました。まさに「左翼の大学」らしい大学でした。そしてこの時期に、後々家族ぐるみ

で付き合いようになるインドネシア大学の文化人類学者B・サントソと知り合い、彼からも多くのことを学びました。ジャカルタについたら彼の自宅に泊めてもらうことまで決め、準備はほぼ整いました。つらいけれども今から考えると、とても楽しい時期でした。

再びインドネシアに、そしてジャカルタ暴動

ようやくビザが下りて、インドネシアに戻りました。今度は最低2年間滞在するつもりでいました。1973年11月初めのことでした。まず驚いたのは入国手続きが煩雑であること、在留証を得るのに気が遠くなるほど時間がかかり入管ではたびたび「コミッシ」と呼ばれる手数料というか賂を取られました。すべて学習でした。そして10日ほどたってから大学に挨拶に行きました。あのユヲノ博士のところですよ。在留許可証はもらうにはもらえたのですが、今度は研究調査の許可証が必要で、特にイスラム教徒の運動が盛んでしかも1920年代の旧共産党運動（1926年の共産党の蜂起で壊滅）とも連携したことがあった西ジャワの特定の地域、当時西ジャワ州クラワン県）での調査には内務省と西ジャワ州の許可が必要だと言われました。そのためにも大学からの推薦状が必要としました。そこでユヲノ博士から、インドネシア大学の政治学科にも、そして隣の文学部の文化人類学科にも西ジャワの専門家がいるので紹介する、加えて彼らとの合同研究という形にしたほうが許可も下りやすい、従って政治学科の非常勤講師になって授業を担当しながら研究調査をするほうが良い、と助言をもらいました。もともと政治学科での非常勤講師をするつもりで準備をしていたので、直ちに同意し、学科、学部、大学、そして先に触れた学術振興機構へ申請書を提出することになりました。まことに都合が良かったのは、インドネシア大学文学部文化人類学科の専任講師がモナッシュで知り合ったブディ・サントソ博士であったことでした。加えて彼の舅が内務省の高級官僚であり、しかも軍、特に後に述べる治安機関に係る陸軍の高官とも知己が多い点で

した。とりあえず現地調査の許可を待つだけとなり、滑り出しはまことに順調でした。

こうした状況で、インドネシア大学に着任して2か月ほどたった時期に、ジャカルタ暴動と呼ばれる一連の政治的危機が起こります。既に着任早々の11月末に起こったのは反日というより、反華僑暴動のようなものでした。要するに圧倒的な経済力を誇るスハルト大統領とその側近たちに食い込んだ政商といわれる華僑への反発が、ショッピングセンターやホテルへのボヤ事件という形をとったものでした。しかし、それが翌年1月にはいわゆる「反日暴動」に発展するとは予想できませんでした。まだ授業を始めてそれほど時間がたっていない段階でしたので、学生は無論のこと、同僚の先生方と知り合うことが始まったばかりでした。先に触れたドロジャトン博士も入っていました。また学生には、後のインドネシアの人権派弁護士の代表的存在となるT・ムリヤ・ルビス、ドロジャトン博士の弟で後に広島大学修士、アメリカのワシントン州立大学（シアトル）で博士となり、インドネシア大学に設置される日本学研究所初代所長となるヘロ・クンチョロヤクティ、さらにはミシガン州立大学でイスラム政治哲学の博士となり、客員研究員として法政大学にも来たことがあったファルハン・ブルキンも含まれていました。そして、彼らの勤めでスハルト政権に批判的なインテリ達が主催する様々な討論会などにも参加しました。それらの会合で討論の中心課題となっていたのは、単なる反日（例えばタイでのような日本製品非買運動）ではなく、むしろ親日系將軍といわれる軍人エリートと華僑資本、それに日本資本が連携した経済発展の在り方、利権の独占への批判でした。こうした反日を手がかりに広がりや厚みを増した体制批判が頂点に達したのが翌1974年1月中旬に実施された日本の田中角栄首相のインドネシア訪問の折の「ジャカルタ暴動」でした。ちょうど同じころタイのバンコクでも日本の田中首相訪問に際して反日運動が展開され、学生と首相の対話がなされたというニュースが流されており、ジャカルタでも大学生との対話が計画されていきました。しかし、現実にはジャカルタ暴動という形で軍と軍、つまり先に

触れた親日系将軍たちとそれに反対する立場をとる将軍たちの対立が火を噴くということになったのは周知のとおりです。

この時期、しばらくブディ・サントソ博士の自宅にお世話になっていましたが、その近所に京都大学東南アジア研究センターのオフィス兼宿舎があり、その所長をしていた矢野暢教授と知り合いました。南部タイの研究をされているとかで、マレー語もお出来になる気鋭の地域研究者でした。その宿舎に入りびたりとなり、当時まだまだ少ない地域研究を志す点で共通した点もあり、また「和製キッシンジャー」を目指すとかいう彼の生き方に関心を持ったのです。そんな折、反日暴動が目前の時期に、矢野先生から「京都産業大学の若泉敬氏が来る、彼の案内を頼まれてくれないか」と言われました。若泉氏のことをほとんど知らなかったので引き受けました。まさか、彼が佐藤内閣の沖縄返還交渉でキッシンジャーと秘密交渉を担当した人で、後に『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』と題した著書を出版した人だったとは知らないで、案内することになったわけです。なんと、若泉先生は田中首相の来訪の時期に重なる形でお見えになりました。そしてホテルからジャカルタの中心部、さらに市内にあるインドネシア大学のキャンパス（サレンバ・キャンパス、当時は経済学部、医学部、大学院）を案内することになったのですが、すでに暴動で中心部は進入禁止、慌ててホテルにとんぼ返りをしたことを覚えています。先生の印象は薄いのですが、とても物静かで、従って矢野先生とは大違いで、かつ深く物思いにふけている、無口な先生でした。ただ、案内がうまくできずにお詫びすると、「君のせいではない」と一言、そして丁寧にお礼を言われました。

事件後直ちに判明したのは、学科主任のユヲノ博士が行方不明、親しかったドロジャトンは逮捕、知り合った大学の学生の何人かが逮捕されたいということでした。学科はほとんど閉鎖状況になりました。私自身も、学部長の命令で学科主任等がどこの監獄に入っているか調べるように言われました。「日本人教員だからきっと怪しまれない」と言われました。歯ブラシと、歯磨きと、

チリ紙と、多少の飲み物を差し入れることになりました。何人かの先生方で手分けをして監獄から監獄を訪問して面会を求めるのですが、なかなか面会を許してもらえず、確認作業も手間取りました。ただ、ドロジャトン博士だけはすぐ会わせてもらえました。「別荘」と冗談に言われるような、応接間があるような監獄でした。驚いたことに、その監獄で彼の隣に収監されていたオランダ人で長らく学生支援活動をしている弁護士にも会いました。以前に討論会で知り合った人権派の弁護士で、反日暴動の「首魁」の一員として連座したようでした。

ところで、ユヲノ主任の逮捕というのは新聞の誤報で、しばらくして大学に復帰されました。正常に戻るとともに、大学での授業、監獄訪問、研究のための調査をする日々が続きました。しかし、監獄訪問等の活動が警察の目に留まったらしく、治安警察に呼び出されて尋問されることになるとは予想できませんでした。そして三週間に一回の割合で研究活動報告をするように命じられました。なぜ活動報告かと聞いたところ、なぜ学生運動や反日活動家と知り合いなのか、監獄を訪問するのはなぜかといったことは何も聞かれず、研究テーマがイスラムの過激思想だという点にあることがわかりました。場合によっては国外退去命令もありうると脅されました。事実、何人かの外国人研究者が追放処分にあったということをユヲノ主任から聞いていました。そこで、主任の助言もあり、研究レポートを提出して警察の疑問に答えるということに正面から取り組むことにしました。ほぼ毎月一回に近いペースで報告に警察本部を訪れました。これが、インドネシア語の上達のみならず研究活動にも大いに役立ちました。それだけではなく、この治安警察の私を尋問した人の上司、陸軍の将校が、私が提出したレポートの一つに関心を持ったらしく、呼び出しを受けました。治安秩序回復作戦司令部に参上するように、と。この治安秩序回復作戦司令部（インドネシア語の省略形で KOPKAMTIB）は、「9. 30 事件」以降に共産党の壊滅に最も力があつた軍（当時陸、海、空、警察の4軍からなっていた）の統合作戦司令部であり、70年代には治安の最高司令部であるばかり

か、軍内の統制とともに、広く社会一般の思想統制に責任がある部局も含まれる、いわばスハルト親衛隊の中核組織でした（初代司令官がスハルト将軍）。ジャカルタ暴動は、実はこの組織の司令官（スミトロ陸軍大将）がスハルト大統領の特別補佐官であった軍人（アリ・ムルトポ中將，スジョノ・フマルダニ中將ら）との対立を原因としていたことがわかっています。この経験をもとに、そして後から様々な資料を集めて、1973、74年の「反日暴動の背景と展開」という小論文を英語で書きました（未発表）。

さて、この呼び出しは国外退去の申し渡しかと緊張して司令部に参上したところ、予想と全く異なり、国際情報部局の部長であった陸軍大佐が、「私は貴君が研究しようとしている日本軍政時代の西ジャワ州におけるイスラム運動の担い手であった一人であり、当時日本軍によって投獄された1500名余の一人である」、と言われました。日本軍政が2年目を迎えた1943年12月に、西ジャワのバンテンという地域で大規模な反日暴動が起りました。日本側の史料では、日本軍政による食糧調達に反対する「イスラム狂信者の反乱」と言われるものですが、首謀者を含む220余名が殺され、1500余名の人が逮捕されるという大事件でした。また、その弾圧に向かった日本の憲兵が20数名の死傷者を出したといわれていました。当人は、西ジャワ州のバンテン生まれの若手リーダーで、日本軍に逮捕され、20年の懲役刑を食らった方でした。日本軍政はその翌々年には日本の敗戦によって壊滅し、ほとんどの投獄されていた人々は解放されました。その後、彼を含めて彼らの多くは敬虔なイスラム教徒であり、独立闘争に軍人として従軍し、独立後はインドネシア最強の「シリワンギ陸軍師団」要人となっていきました。彼もその一人でした。この方が反乱のあったご自身が出身地という村に案内してくれました。反乱から30年たった記念集會に招かれたというより、同行を許されたというわけです。反乱後に入村した初めての日本人だということで、「石をもって追われる」覚悟でいましたが温かい歓迎を受けました。「首謀者」のご遺族にも紹介していただきました。日本人憲兵で亡くなった2人のお墓にお参りをした際、印象に残っている彼ら

の言葉は、「我らも歴史を背中に背負って戦い、日本人もその歴史を背にして戦った。歴史とはそうして作られるものだ」というものでした。後に、この時に提供された資料も参考に、「反日運動の比較研究」としてモナッシュ大学出版から出版しました。それだけではなく、いやそれ以上に私の研究関心の動向に大きな影響を与えたのは、この元反日運動の担い手で、後に軍の中枢に上った軍人から、先に触れた治安秩序回復作戦司令部の役割についての説明を受け、資料もいただいたことでした。現代史に対する関心が抑えがたく強まるのを感じました。このインドネシアにおける治安体制に関しては帰国後雑誌『世界』に、インドネシアの治安機構と政治犯に関する報告を、ペンネームで、掲載しました。

事後談ですが、治安秩序回復作戦司令部の部長との面会を機に警察本部からの呼び出しはなくなり、ビザの延長だけではなく研究調査の許可証も全く問題がなくなりました。さらに、実はその直前に在インドネシア日本大使館からも呼び出しがあり、インドネシア警察本部（実は先に触れた治安秩序回復作戦司令部）から私に関する問い合わせがあり、警視庁への問い合わせを要請されたということを知られました。担当の方にこれまでの事情を説明し、加えて西ジャワ州バンテンでの経験をお話ししました。よほど驚かれたのか、それほど時間がたたないうちに再び呼び出しがあり、担当の方のお陰だと思います、何と大使にお目にかかる機会を得ました。この大使はインドネシアで「住民目線での両国関係」の促進を掲げる極め付きのリベラルな方でした。直接日本軍政時代のバンテンでの反乱の話をしたところ、韓国大使を経て外務次官まで上り詰められたこの須之部量三大使は、「一度花束を持ってその村を訪れたい」とまで言うていただきました。

もう一つの事後談ですが、京大の矢野先生が『世界』に掲載された私の報告を読んだらしく、「誰だ、この設楽耕嗣というのは」「鈴木君ではないのか」と何度もおっしゃったことがあります。むろん、「知らぬ、存ぜぬ」を押し通し

ました。こうした用心深い措置を勧めてくださったのは当の雑誌の編集長（安江良介氏、後の岩波書店社長）でした。これも後でわかったのですが、東京で出版されたインドネシア関係の出版物は、全てではないにしてもかなりの程度、インドネシア語に翻訳されて先の治安秩序回復作戦司令部に送られる仕組みになっていたようです。先に触れた元インドネシア首相で、スカルノ大統領のイデオログと言われたルスラン・アブドゥルガニ氏を定期的にお伺いしていたある時、氏の書斎のテーブルに置かれていた「クリッピング・サービス」と言われた世界の諸雑誌や論文のコピーの束の一番上のものが目に留まりました。インドネシア語の論文のコピーですが、間違いなく私の『世界』の論文の翻訳でした。書斎に戻ってこられたルスラン氏は、それを見て、「よくできている、我々の間でも評判になっている」と言って私に向かってにやりと笑いました。インドネシアにおける政治犯の実態を報告、分析したものでしたので、内心冷汗が出ましたが、きっとそれは私が書いたものだということをご存じだったと思います。それどころか、それを機会に頻繁に会う機会を与えてくださり、ご自宅の書庫を自由に散策する許可をくださいましたし、多くの政治指導者を紹介してくれました。その中には元副大統領（初代、M・ハッタ）や、インドネシア憲法の起草委員の一人であったY・ヤミン、初代外務大臣A・スバルジョ、初代労働大臣I・K・スマントリ、さらには大統領制の下での初代総理大臣S・シャフリルの奥様（実はスジャトモコ第2代国連大学学長の姉）がいました。また、彼の自宅からそれほど遠くないところに住んでいた当時の副大統領アダム・マリク氏にも紹介いただきました。アダム・マリクは独立後に国营通信社アンタラを設立する人ですが、スマトラのバタック族出身の彼は実は私が関心を持っていたやはりスマトラ出身のタン・マラカの左翼思想に共鳴して一時期政治活動を同じくしたことがありました。こうして研究テーマとも関連しますが、それよりはるかに広い問題関心、つまり建国後のインドネシア政治、に広がっていくことを止められなくなっていました。そして、もうその頃は警察本部に呼び出されることもなくなっていました。大学での授業も正常化し、学部を超えた多くの研究者との出会いや交流が増えました。特に文化人類学が

専門のブディ・サントソ教授とは西ジャワ、とりわけジャカルタの東に位置するクラワン地域の現地調査で度々現地訪問をすることができるようになっていました。留学の一番楽しい時期になっていました。またこうした交流を通して知り合ったバンドンにあるパジャジャラン大学の社会科学・政治学部の学部長から、教養科目（政治学）の非常勤講師としてバンドンに定期的に来ないかと誘われ、一年間授業をすることになりました。毎週一泊二日の日程で、ジャカルタから4時間ほどかけてバンドンを訪れ、授業をしました。学生の中には地域の有力者の子弟が含まれており、その中には後に親しくなるシリワンギ師団の将校（先に触れた反日暴動の指導者とは異なる）の娘や、西ジャワ州政府の高官の息子たちも含まれていました。

1930年代の歴史の研究も楽しかったのですが、資料の制約やインタビューの難しさなどもあって、遅々として進みませんでした。とにかく当時のインドネシアの図書館や公文書館は恐ろしく貧弱で、なおかつサービスが行き届いておらず、1930年代の新聞を系統的に読んだのですが、整理が十分にされておらず、また蒐集が不完全なために、恐ろしく時間がかかりました。他方、現実問題を勉強してみたいという、止むことのない関心が、沸々と湧いてきたことはすでに触れました。独立後の第二世代に当たるスハルト体制とはどんな政治体制なのか、それはインドネシアだけの特徴なのかどうか等々を知りたくなったのです。第一世代の政治に関しては私の指導教授であったフェイス教授の作品群がかなり明快な答えをくれました。しかし、もっと比較政治にウィングを広げて、第二世代の政治を理解したいと考えるようになっていました。そして背中を押すようなきっかけとなったのは、やはりルスラン氏に関係します。ある時、氏の書庫を頼まれて整理していたところ、スペインの権威主義体制の研究者であったホアン・リンツの本と出会いました。「これを貸して頂いてよろしいですか」、「やるよ」。頂きました。当時はすでにブディ・サントソ教授の家から出て、同氏の紹介で一軒家を間借りしていました。このリンツの本を夢中になって読みました。そして、関連する研究書が読みたくなりました。ある

ものはインドネシアでは「発禁」ないしは入手困難でした。でも「ルスラン書庫」に行けばほとんどがありました。特にインドネシアに関する研究書はほぼすべてそろっていました。その中の一つに、コーネル大学のB・アンダーソンのものがありました。日本語でも翻訳がある『想像の共同体』でした。他にも、彼の『政治の言葉』(コーネル大研究叢書)が関心呼びました。インドネシアに来る前に読んだのは彼の博士論文を含む歴史研究が中心でしたが、インドネシアではより分析的、理論的研究に関心が移りました。しかも、こうした彼の作品にしばしば登場するのが日本の政治思想研究の碩学丸山政男の研究書です。駒場時代に夢中になって読んだ丸山政男に再びひかれましたが、まったく違った関心から読みました。こうして、研究三昧の日々はあっという間に過ぎ、1975年末にオーストラリアに帰国することになりました。

オーストラリアからマレーシアへ

もう一度オーストラリアに戻り、膨大なインドネシアから持ち帰った資料を整理しながら、いくつか小論文を書き、論文研究を進めていました。同時に、モナッシュ大学での非常勤講師を務めるようになりました。これはこれで面白く、論文は遅々として進まなかった反動だったかもしれませんが、とても楽しみました。それにしても、モナッシュをはじめ、オーストラリアの大学はイギリスやアメリカの伝統を継いでいるのか、講義に関しては特別の研修を受けさせるという伝統がありました。私の場合、担当した東南アジアの政治を英語で授業をする、それを東南アジア政治の専門家、政治学の専門家、英語学の専門家が聞いてくれて、授業後には3人から厳しい指摘を受けるのです。特に英語学の先生からは、発音で聞き取りにくい語彙、さらにはイントネーションについてたびたび指摘を受けました。大変ためになりました。当初は緊張もあり、何を言われているのか理解することが困難でした。しかし、後々大いに役立つ経験をさせてもらいました。こうした模擬授業が3回あり、そこで「合格」を

いただいて授業を始めるということになりました。この授業のためにはかなりの予習が必要でした。準備もしっかりする習慣を身に着けるようにと指摘されました。最初のころはほとんど毎回講義録を書いて、それを読むというような形でした。徐々に慣れ、レジュメを配布してそれをもとに講義をすることができるようになりました。しかし、聴講学生からの質問に十分に答えることができるようになるには、さらに時間がかかりました。何とかできる自信がついたころにはセメスターが終わっていました。

面白いもので、政治学科だけではなく、日本語学科からも次のセメスターに授業をやってほしいと頼まれました。むろん日本政治がテーマでした。これも引き受けて、改めて日本政治を勉強することになりました。京極純一先生の『日本の政治』（英訳版）などはとても参考になりましたし、その他にも、初めて英文での日本研究に真剣に取り組むようになりました。これらの中には、かつて70年安保闘争盛んなりし時代に、東京で「日本の怒れる若者」調査団の一員として私もインタビューを受けたE・ライシャワー（ハーバード大学）、R・ドア（エセックス大学）、ベン＝アミー・シロニー（ヘブライ大学）、そしてY・ガルトゥング（オスロ平和問題研究所、当時）の作品も含まれます。これらの本を探するのは一苦勞でしたが、さすがにオーストラリア、それもモナッシュ大学には日本関係の書物は有り余るほどありました。（特に愛読したのは森鷗外のドイツ留学日記、『森鷗外全集』第13巻、でした。）また、ジャカルタにまで訪ねてきてくれたオーストラリア国立大学のP・ドライスデール博士やA・ストックウィン先生をキャンベラに訪ねたりして、旧交を温めたりしました。さらに、メルボルンにもメルボルン大学のような名門校を含むいくつかの大学があり、それらの大学の研究者とも学会を通して知り合いが増えました。加えて、メルボルンに滞在していた日本人研究者とも知り合う機会がありました。中にはオーストラリアに永住され、かの地に骨をうずめることになった方も少なからずいました。

こうした時期に、永積昭先生から、マレーシアのマラヤ大に行かないかという誘いを受けました。フェイス先生にも相談しました。お二人ともコーネル大学で研究をした経験者です。結論から言うと、行け、です。その誘いに乗って応募し、行くことになりました。日本ではほとんど見受けられないことでしたが、大学、それも世界の大学では「学閥」に近い人脈のネットワークとも呼べるものがあり、出身大学によって「コーネル政治」とか「イエール政治」とか「モナッシュ政治」というように、世界のどこかに空きポストがあると、先輩後輩、指導教授と院生等が連絡しあって確保に努めるという大学間競争が展開されていました。「マラヤ大にこういうポストがある。是非行くことを勧める」。それは勧誘というよりは半ば命令でした。かくて、論文未完成のまま、マレーシアのマラヤ大の教員になることになりました。しかも、そのポストは日本の国際交流基金が研究費も出してくれる特典がついていました。オーストラリアでは日本人、インドネシア語ができる、英語での講義ができる、国際関係の素養があるという条件を満たす人はほとんどいなかっただけではなく、オーストラリアに対してはフェイス先生、日本に対しては永積先生の推薦がありましたので、文句なく採用されました。任期は三年間、マラヤ大学文学・社会科学部歴史学科、国際関係論分野での授業を担当する客員教授になることが決まりました。仕事をしながら論文をまとめるという離れ業を必要とするような状況に追い込まれ、半ばあきらめるしかないかと覚悟を決めてマレーシア行を決意しました。フェイス先生の指導もあって、モナッシュ大学は休学という形にして渡航することになりました。ただ、この決断は後から考えると致命的な問題がありました。休学期間を入れて6年間の時限があることを見落としていました。その結果、論文提出資格の取得という形で終了してしまい、1981年にマレーシアから論文を提出した時に、論文は受理されなかったのです。悔しい「失敗」でした。

ところで、マラヤ大学は、かつてのオックスフォード大学マラヤ分校（現在のシンガポール大学）のそのまたクアラランプール分校がその前身です。当時

のマレーシアには大学は2つ。その一つがマラヤ大学、もう一つが新たに開講されたマレーシア国立大学（UKM）でした。その後陸続と大学が設置され、ペナンにある科学大学（USM）、クアラルンプール郊外にある農科大学（UPM）等々が開校し、現在では私立大学も設置されるようになったばかりか、モナッシュ大学の分校すら設置されるようになっていきます。しかし当時はまだその直前で、中でも一番伝統校といわれたのが、マラヤ大学でした。私が赴任した学部、特に歴史学科は中でも古い伝統を持つ学科で、主任は中国人系、副主任はマレー人系とインド人系が占めるといった具合に、教授陣は主要なマレーシアを構成するエスニック集団が微妙なバランスを保った形でした。しかも、当時は第3代総理大臣（フセイン・オン）の下で次期総理大臣の有力候補であったマハティール文教大臣の下で、「マレー化」、つまりマレー語を基礎としたマレーシア国語を使う授業を奨励する、マレー人系の教員を増やすだけでなく管理部門の責任者とする（例えば学科主任や学部長）、学生に関してもマレー人系の学生を優先的に採用するといった「マレー人優先策」が始まったばかりでした。いわゆる「ブミプトラ（土地の子）」優先策です。インドネシア大学でも「プリブミ（ブミプトラとほぼ同じ意味）」政策が掲げられてはいましたが、マレーシアのほうがはるかに厳格でした。インドネシアでの経験もあり、またインドネシア語とマレーシア語（マレー語とは微妙に違う）が極めて近似していることもあり、授業はマレーシア語を使うということにあまり抵抗はありませんでした。

面白かったのは、特に比較的多数派であった中国人系の教授陣は、ほとんど例外なくアメリカやイギリスなどの留学組で、急速なマレーシア語での授業の奨励にはついていけない人が多く、英語での授業が圧倒的であったと記憶します。「珍しい日本人」と言われたのを覚えています。そのせいもあって、マレー人系の先生方とは沢山知り合いができました。就任当時の学部長は文化人類学者のT・オスマン教授、副部長は、後々まで家族ぐるみで付き合うようになったアブ・バカル・ハミッド教授でした。後者とは、私がジョンズ・ホプキン

ス大学に留学した際に、彼の留学先であったミシガン学からワシントン DC にまで会いに来てくれた人でもあります。大学を退職された後はマレーシアの通信社（ブルナマ）の社長を務められました。同じ学科にもマレー人系の教員が何人かいました。しかし、右も左もわからない折に、一番頼りになったのはやはり「モナッシュ組」、つまりモナッシュ大学留学組、と「コーネル大学留学組」でした。特にモナッシュ大学ではインドネシア研究の先輩にあたる H・クラウチ博士（メルボルン出身、後オーストラリア国立大学教授）はインドネシアの軍の研究で著名ですが、モナッシュ大学での教員仲間でもありました。また、彼の奥さんがマレー人で、マラヤ大学の歴史学科出身であり、モナッシュ大学博士でもあった方で、UKM の教員として就職していたこともあって、この夫婦にはいろいろと教えてもらうことになりました。

他方、中国人系の学者との知り合いも沢山できました。現在までも友人である元経済学部長のチョン・キーチョック博士（LSE 出身、テニス仲間、後世界銀行に転出）、やはり経済学部公共政策学科のリー・ポー・ピン博士（コーネル出身、日本政治の専門）、スティーブ・リヨン博士（UC バークレー校出身、中国政治、華僑政治専門、後にマレーシアの戦略国際問題研究所副所長）、同じ学科のリー・カム・ヒン博士（モナッシュ出身、後のペナンの英字新聞の編集員）等々です。

マレーシアで記憶に残る人々

中でも印象が深い人々の中で筆頭に挙げるべきは、マレーシアのマレー文学研究の第一人者であり、作家協会の会長（後になってアセアン作家協会の会長もされた）でもあった、同じ学部のマレー文学科主任であったイスマイル・フセイン教授でした。物静かでありながらきわめて明晰で、かつ深い思慮と激しい愛国心を持つ人でした。インドネシア大学文学部への留学経験があったせい

か、私の経歴に非常に親しみを覚えたらしく、そして私のインドネシア語がまことに「ジャカルタ弁」だということに感心して、「君は本当に日本人か」と聞かれたことを覚えています。マレーシアが連邦国家として成立する以前の1960年代前半までは、多くのマレーシアのインテリは留学と言えばインドネシアであって、イギリスやアメリカ等に大量の留学生が行くようになるのは1970年代に入ってからだと思います。ちょうど日本から欧米諸国ではなくアジアに留学することが始まったのと軌を一にしているとも言えます。さて、ズキという音声には、インドネシア式に言うとス・ズキと2音節に分けることができ、スというのは接頭語（大きいとか優れたとか年上と言った良い意味）があり、例えば初代大統領のスカルノはス・カルノ、つまりカルノの中でも兄貴分といった意味があります。実際スカルノ大統領は愛称をジャワ語でブン・カルノ（カルノ兄貴）と呼ばれることを好んでいました。そして、第二音節のズキですが、これは西スマトラのバタック族によくある名前で、マルズキという名前も決して珍しくない。こうしたことがあって、スマトラのバタック族の隣に位置するアチェ族の出身であるイスマイル教授はお聞きになったのだと思います。イスマイル教授とはその後長らくお付き合いをし、日本にもお呼びしたことがあります。弟は著名な画家であり、イスマイル教授のおかげでたくさんマレー人芸術家や作家、さらには政治家の方々に紹介していただきました。彼のマレー人への観察や評論は極めて厳しく、「マレー人優先政策」に乗って要職に就きながら浅薄なナショナリズムに走るマレー人エリートたちへの批判はまことに説得力があり、こんなに深い思想の持ち主がいたことに驚きました。また彼のインドネシア観、特に文化的な母国でありながら社会・経済的、政治的に立ち遅れた強大な隣国という見方は、劣等感と優越感がないまぜになっており、とても参考になりました。

二
八
七

二人目は、ジョモ・スンドラム博士です。名前からいってインド系ですが、お母さんが中国人で、中国人とインド人の間で生まれた、マレー人そっくりの外観を備えた方です。まさに、“Indo—Chinese”です。ハーバード大学の優

等生で、ハーバード大学で博士号を取得した後ハーバード大学で教えた経験を持ち、私と同じ時期にマレーシアに帰国してマラヤ大に赴任した気鋭の学者でした。マレーシアでは珍しく、完全な Neo-Marxist で、「決定論に味方しない奴はマルクス主義者とは言えない」「決定論ができない奴は頭が悪い」「文化論者、つまり相対主義者は、ダメだ」と、ずばずばものを言い、論敵を切って捨てる。当然大学当局にも、警察にもにらまれていました。ちなみに、当時のマレーシアには「国内治安法 (ISA)」の他、マラヤ大学を含む大学には「キャンパス・アクト」と呼ばれる治安法が施行されており、無届の5人以上の集会・集合は禁止されていました。実際、私が住んでいたキャンパス内に位置する教員用の住宅でホームパーティを開催した際、5人以上の学生たちが集まりましたので、警察から警告を受けたことがありました。彼はそんなことにお構いなしに、キャンパスポリース (大学が独自に組織する警備隊員) に平気で食って掛かり、しかも新聞にも批判的な記事を掲載する人でした。数年後には彼を含むかなりの数の研究者 (特に中国人系) が国内治安法違反の疑いで尋問を受けたり、逮捕されたことがありました。

もう一人はマルコム・コールドウェル博士というロンドン大学、特に LSE の研究者でした。彼の論文はオーストラリア時代にいくつか読んだこともあり、またモナッシュ大学を訪問された折からの知己でした。マルコム博士もいわば原理主義的なマルクス主義者で、当時のニューレフトと言われる潮流の代表的な研究者でした。お互いに共感するところが多々あったことも事実です。彼はカンボジアのポルポト政権に対して共感を持つと同時に激しい批判を展開しており、カンボジアに渡る途中でマレーシアに立ち寄りました。「マレーシアでは誰に会うのか」と聞くと、「お前だ」と言われたことがあります。何人かのマレーシアの同僚を紹介し、意見交換をした記憶があります。異口同音に「大丈夫かな、まじめだけど楽天的。もうイギリスの左翼インテリの言うことを何でも聞く時代ではないのだけれど」という感想がほとんどであったことを覚えています。当時はポルポト政権による虐殺、それに対する親ベトナム派共産党

を中心とする反ポルポトグループの反撃、さらにはこのグループ（フンセン派、現在のカンボジア首相の率いる共産党）とともにカンボジアにベトナムが侵攻、そしてそのベトナムに対して「懲罰」として軍事侵攻を中国が行うといった複合的な激しい対立と闘争が展開されていました。マルコム博士は「ポルポトと会って説得する」と意気込んでいたのを思い出します。彼は結局ポルポト政権によって暗殺されたといわれていますが、詳細は分かっていません。ただ、彼の博識、議論の強さ、そして政治に対する情熱は半端でなかったのが印象に残っています。

四人目は、先に触れたチョン・キーチョック、中国人系の学者です。経済学部の学部長に若くして上り詰め、その後世銀に転出した人だというのはすでに触れました。そのチョン・キーチョックの一族はクアランプールという当時のマレーシア首都圏の大地主の一族で、彼はその三代目の嫡男でした。何しろ都心部、東京でいうと日本橋から銀座、新橋といったまさに都心部の三分の一の土地の持ち主で、その土地の管理会社のオーナーでもあったわけです。先に触れたように、マレー人系の研究者は「マレー人優先政策」によって管理職への道が開かれています、マレー人でないと学部長止まり。学部長は学術的地位、上の副学長や学長は大学の顔であるだけではなく、一種のマレーシア王室の「藩屏」みたいな役割を持っていました。ロイヤル・アカデミーという組織が残っていましたから。チョン・キーチョックはよく「経済学というものは、普遍的な原理の追及が役目だけれど、マレーシアでは政治の下僕だ」、「経済学は自分だけでできるけども、経済政策は作れない」、「政府の政策批判をすると首が危ない」などと言っていたことを思い出します。マラヤ大の教授になった時に、私自身もマレー人はマレー人、中国人は中国人、そしてインド人はインド人という風に議論がどうしてもエスニック集団型、つまり縦割り式に分かれてしまう経験をしました。教授会は大変緊張感のある、「やっぱり多民族社会ってこういうものか」と思ったこともしばしばありました。加えて、議論が縦割り型になって膠着状態になると、「鈴木、中立的な立場にいる君はどう思うか」

とよく意見を求められました。「日本人は正直である。嘘は言わない」ともいわれました。このキーチョックの異母妹と結婚したのが畏友のリー・ポー・ピン博士でした。この二人とはいまだに時々会う関係です。

五人目は、後の総理大臣であったマハティール氏です。ある学内の会合で、それに臨席した文教大臣のマハティール（当時）にお目にかかった時、「自分は政治的に失脚した時に日本留学をしたいと思い当時のアジア経済研究所の客員研究員に応募したことがある。むろん経済学は全くと言っていいほど知らなかった、自分は医者である。でも、まさか不合格になるとは想像していなかった。有力政治家はイギリスでも、アメリカでも優先的に受け入れてくれるものだと思っていたからだ。しかし、日本は違った。正直に能力判断をして不合格にした、逆に、自分はこんな馬鹿正直な社会、それが通用する社会に魅力を感じ、恨むどころか尊敬の念を覚えたことがある」と話してくれました。マハティールは後々筑波学園都市を視察し、それをモデルとした学園都市、研究都市を次々と実現していきます。ある意味で彼は例外的な人であったと思います。彼は父がインド人系、母がマレー人系で、マレー人としてのカテゴリーに住民登録されていました。そして、当時のマラヤ大学医学部に入学した時には、100人中マレー人系は3人だったと言っていました。そういう植民地支配が残したいびつな社会を解体、再編することが彼の歴史的使命であったというのです。日本の近代化の経験は、そうした彼の目からすれば、マレーシアの当時のニーズにまことに望ましいモデルだと映っていたのだと思います。

帰国と平和研究との出会い

瞬く間に3年近くの時間が過ぎ、81年にほぼ十年ぶりに帰国しました。いろいろな人の助言等もあって、神奈川大学で非常勤講師をすることになり、次いで東大駒場の国際関係論アジア分科が設置されたのを機にこれまた非常勤講

師を引き受けました。いずれも3年間の予定でした。そのときの駒場の二期生が浅見靖仁さんでした。一橋大で長らく教員をされた後法政大学に移られたタイの専門家です。それはともかく、十年ぶりに帰ってきて一番びっくり仰天したのは、アジア経済研究所、それからアジア政経学会等々の方と会うと、非常に多くの若手研究者が既に東南アジアに留学したり、あるいは現地調査に出かけたりされているということでした。私の頃はそうしたファシリティは全くありませんでした。アジアではなく、アメリカやヨーロッパに留学する人が多かったのは、やはりこうした奨学金や留学プログラムがなかったからであったと思います。当時でいえば、東南アジアで現地調査や研究ができると言えばアジア経済研究所の職員になることが早道だといわれていました。大学間のネットワークも薄く、結局先進国の奨学金で途上国研究をする以外になかったのです。ところが、帰ってきた1981年、文科省の奨学金があることに気づきました。もっとも、オーストラリアにいたころインドネシアやマレーシア、タイの先輩研究者は、かなりの人々が元はCIAとかイギリスでいえばMI6のような国際情報機関の調査官をしたことがある方が多いということを知っていました。コーネル大学の東南アジアプログラムを作った創設者のひとりであったG・ケイヒン教授は実はCIAの調査官だった。また、オーストラリアの大学のマレーシア研究者はほとんどがイギリスのMI6で調査をした人だと聞いていました。道理で、ほとんどの先輩研究者は語学が堪能です、現地経験も豊富でした。それに比べて、1970年代以降の我々の世代はかなり異なります。なぜならそうした研究者を養成する必要の大本であった植民地支配体制は崩壊しました。そしてそれに代わって研究に資金を提供し始めたのは冷戦体制下のアメリカやその同盟国でした。しかもそれは政府や情報機関の資金でしたが、1970年代を過ぎると、民間財団による研究資金提供が主流となり始めたと言えます。ロックフェラー財団、フォード財団、ドイツのフォルクスワーゲン財団、日本財団、トヨタ財団等々です。それはそうとして、帰国して最初に関心の対象となったのは平和研究であり、坂本先生との再会でした。

そのきっかけは、当時坂本先生が運営されていた平和問題懇談会に参加し、平和研究と私に関心を持っていた途上国研究（第三世界研究ともいった）には重なる点が多いことに驚きました。伝統的な狭い意味での戦争学、紛争学に対抗する平和学会ではなかったわけです。この研究会は英文雑誌も出版しており、小論文を掲載していただきました。むろん、こうした学問的傾向については、オーストラリアでも、インドネシアでも、そしてマレーシアでも盛んに議論を呼んでいましたので、驚きはしませんでした。何に驚いたかという点、平和研究の専門家の大学におけるポストがほとんどないという事実でした。国際政治学とか国際関係論、さらには国際政治史といった講座がほとんどで、平和学を看板とする講座は当時なかった。他の国にあったわけでは無論ないのですが、例えば平和学会への参加者の数を聞いた時には本当に驚きました。その大きさに、東南アジアは無論、オーストラリアで平和研究を志していた人と言えば多分一桁台がほとんどであったと思います。逆に日本では何百人という膨大な数の、それこそあらゆる分野の研究者が取り組んでいる。この好対照に驚いたというわけです。逆に、異なったディシプリンの専門家が共通の課題を議論するという点では新鮮でしたし、まして坂本先生は大江健三郎や井上ひさしといった作家にも参加を呼びかけ、一般向けの声明を発信するといった「実践的」平和研究を心がけておられ、改めて関心を持ちました。それがこれ以降の平和研究への関心のきっかけとなりました。

この平和研究で出会った先生方には中央大学の高柳先男教授、早稲田（後に東大）の鴨武彦教授、東大の高橋進教授などの気鋭の研究者がいました。それぞれが地域研究と言い過ぎですが、フランス、アメリカ、ドイツといった地域の政治の専門をお持ちでしたので、途上国研究、特に東南アジアの研究をしていた私にもすんなりと仲間入りできる雰囲気であったと思います。こうした縁もあって、高柳先生が平和学会の会長になられた折に平和学会と平和問題研究懇談会の「合併」が実現しました。またこの当時、私も副会長であった時期でしたが、国際平和研究学会の総会を京都国際会議場と立命館大学で開催

しました。アジアで開催されたのは初めてでした。世界中から沢山の研究者が集い、熱気のある総会だったと思います。ロシアからはゴルバチョフ大統領の側近と言われたヤコブレフ書記、ツィプコ元共産主義青年同盟の要人、国際問題研究所のシェフツォバ博士等々、冷戦の終結の時代に相応しく多くの招聘者、参加者を得ました。私の関係でいえば、オーストラリアからは私の指導教授であったフェイス先生、親友だったA・スミス（シドニー大学）教授、さらには東南アジアからもかなりの方が参加してくれました。またこの総会がきっかけとなって、中国における平和研究（当時は共産党の平和と軍縮のための委員会のもとに北京と上海にいくつかの平和研究機関があった）との交流も始まりました。

むろん、平和研究と並行して、より正確に言えばそれに先行して、これまで東南アジアで考えた現代政治のテーマ、権威主義支配体制、についても何本か論考を書きました。その一部を雑誌『世界』に連載させていただくという幸運にも恵まれました。また、それらを書き足して勁草書房から『東南アジアの危機の構造』として出版もさせていただきました。またこれがアジア経済研究所の研究奨励賞の対象となる榮譽にもよくなりました。これら一連の論考は、長期的視点に立った旧植民地における後発国、特にインドネシアをはじめとする東南アジアの政治の特徴を描くことでした。とりわけ力点を置いたのは、なぜ革命的な変化を経験した旧植民地が独立後の自由と民主主義、経済発展と平等という高らかな目標を掲げながらことごとく失敗し、権威主義的支配体制に移行していたのかを解明することでした。そして、それを冷戦の地域への浸透という角度からではなく、独立後の政治と経済の構造的矛盾が生み出したダイナミックな国内変動としてとらえようとしたものでした。「二重経済」とか「複合社会」といった植民地支配が築き上げた仕組みは一朝一夕には解体できない。それどころか、古い封建的な制度や仕組みと分かちがたく結びつき、それこそ「岩盤」のように立ちはだかる。こうした制約のもとでの政治と経済の処方箋は、例えば1930年代の日本や1960年代前半のラテンアメリカ諸国の場合のよ

うに、軍部独裁、単一政党の独裁、カリスマの指導者の支配等々、強権体制でなければ政治安定と経済発展を同時に実現はできないとするリアリズムを生んだのではないかというのが私の仮説であり、中間的考察でした。そして、現実にはこうして登場した政権は、インドネシアだけではなく、マレーシア、フィリピン、そして植民地支配の経験を持たないタイでも登場し、以降20年から30年の間持続することになったのではないかとも思います。そして、権威主義支配体制が成立し、長期化するという分析をしている時から、ではどうしたらこの強権政治体制は変わるのか、だれが変えるのか、そしてその結果誕生する新たな政治体制の特徴は何かという問題意識が燻り続けていました。

そうこうしているうちに、法政大学で5年近くの時間がたち、サバティカルの順番が巡ってきました。念願であったジョンズ・ホプキンス大学に留学をさせてもらうことにしました。2年間。法政大学には5年ルールというのがあって、着任して5年たつと留学（国内か在外かを選択できる）の資格ができ、帰任して5年がたつとまた留学の機会が巡ってきます。ただ当時は、勤続20年で3年間の留学期間と定められていましたので、どう利用するかは学部や学科、さらには個々人の事情次第です。私の場合は最初の在外留学で2年間をまとめて取得しました。2年間と言いましたが、実際は1年間が規定であってももう一年延長できるのです。しかも、その延長はほとんどの場合了承されますので（教授会で）、本当にまとまった期間授業から解放され、研究に没頭できる夢のような期間です。行ったら行ったきりで、レポートくれとも言っていないし、1年たつと「延長願いを出してください」だけ。誰も何も聞かない。実に素晴らしい大学でした。

なぜ、ジョンズ・ホプキンス大学に行ったかということ、当時同大学の高等国際問題研究院（SAIS）の学院長がジョージ・パッカー教授で、ライシャワー教授の高弟の一人でした。その彼に東京でお目にかかり、同研究院で非常勤講師をしながら東南アジア・日本の関係の研究することを認めていただいたか

らでした。そのパッカード教授に私を紹介していただいたのが偶々知り合ったジム・アア教授、アメリカ海軍の高官で後にブランダイス大学日本研究センター所長、でした。1960年代の日本の海上自衛隊の研究をされていた方でした。パッカード教授はご存知の方も多いと思いますが、1960年安保闘争の研究者であり、ライシャワー大使の補佐官を務められた方でした。ジョンズ・ホプキンス大学にはもう一人ライシャワー大使の補佐官だった方が教授をされていました。元CIAの高官で、占領時代から日本と深くかかわり、後にカーター大統領の時代に日本関連の補佐官をされていたこともあるナサニエル・セイヤー教授でした。多分、彼は中曽根首相の「ゴーストライター」としての方が有名かもしれませんが、いずれにしても、これらの方々が現実政治に関係された1960年代前半ではなく、1960年代後半に起こった東南アジアの一大政治変動の背景を知りたかったからでした。実は1960年代前半には朝鮮半島で朴軍事政権が成立します。そしてベトナムではアメリカの介入が泥沼化し始めます。そして、1960年代後半からはその他の東南アジアで陸続と私が見る「権威主義支配体制」が成立します。タイのタノム・キチカチョーン軍事政権、フィリピンのマルコス政権、マレーシアのラザク政権、インドネシアのスハルト政権です。これらは、1960年代前半から中ごろに登場するラテンアメリカの軍事政権にも極めて似ています。先に触れたスペインのファン・リンツが述べる通りに見えました。そして、ジョンズ・ホプキンス大学のSAISはラテンアメリカ研究でもよく知られていました。まことに最適の環境だと読んだのです。

アメリカ留学と方向の転換

実はこれにも前史があります。留学の一年前に、アメリカの国務省情報サービスの下で「安全保障問題」に関する40日間招聘プログラムというのがあり、それに招待されました。このプログラムは個人とグループの両方があり、私の場合はグループの方でした。このグループにはロンドン大学LSEの安全保障

問題の専門家である B・ブザン教授、オックスフォード大学の C・クーカー博士、NATO の安全保障問題専門家（ドイツ人）、フィンランドの陸軍大佐、タイの陸軍大佐、ヨルダンの陸軍大佐、ノルウェーの有力紙の安全保障部門編集委員、フィリピンで最大の購読者の持つ新聞の政治部記者と私の 8 人のグループでした。むろん、この中ではブザン教授と一番親くなりました。もともとは安全保障の専門家だったのですが、平和研究との交流が増えるにつれ、ヨーロッパ全体の安全保障システムの代表的論者となります。また、アメリカを中心とする国際研究学会（ISA）からイギリス国際研究学会を分離独立させ、その初代会長になった人でもありました。さて、このグループ・プログラムではワシントン DC での国務省、国防総省でのインタビュー、ジョンズ・ホプキンス大学の SAIS、ブルーキングス研究所から始まり、ボストンでのハーバード大学、ボストン大学、西海岸のスタンフォード大学、カリフォルニア大学ローレンス・リバモア研究所（原爆研究で知られる）、中西部のいくつかの戦略空軍基地などを訪問するという「贅沢」なもので、毎日様々な専門家たちと議論をするという最高に学べるものでした。とりわけ、ブザン教授とはいろいろな点で意見が一致するという経験をしました。一致というよりは、お互いに異なる意見であるという点に一致を見たといった方が正確かもしれません。そして彼の見立てで、ロンドン大学に来ないのなら、ジョンズ・ホプキンス大学が良いだろうといわれました。従い、平和研究でも、そして地域研究でも、どちらからもそこが良いのではないかと考え、先に触れたパッカー教授やアウアー教授と接触をして、留学先を決めたということです。

ワシントン DC に落ち着いて、早速着任早々、パッカー学院長から「太平洋の政治」というコースワークを担当するようにと仰せつかりました。実際には東南アジアと日本の関係という内容でした。同時に、もう一つのコースワークとしてインドネシア語でインドネシアの政治を学ぶという、ごく少数の学生を想定した授業を設置しました。一人もいないのかと案じていたらなんと 15 人ほど登録してくれたので驚いたのを覚えています。前者のコースワークは、

珍しさもあって、いつも教室は満杯でした。加えて、アジアからの留学生が多く、いつも質問攻めにあいましたが、とても楽しい時間でした。その第二期生に、ティモシー・ガイトナーがおりました。後々若くしてオバマ政権の第一期の財務長官を務めた人で、あんなにも早く出世するとは想像できませんでした。大変な優等生でした。授業の傍ら、SAISはラテンアメリカの研究についてたくさん専門家がおり、しばしば著名な研究者、例えば当時でいえばアルゼンチン出身のG・オドンネル博士のような人が来て講演をするわけです。A・シュテパン教授という、当時プリンストン大学だっと思えますけど、ブラジルの研究で知られた方の講演会にも出席できました。しかし何ととっても大きな影響を受けたのはアジア研究の専門家たちでした。中でも、パッカード学院長に代わって私の上司になったのは、ポール・ウォルフウィッツという、元インドネシア大使でした。もともと國務省のエリート集団が集まるので有名な政策企画局、policy planning unit、出身のエリートでした。かつて冷戦時代初期には対ソ封じ込め政策の立案に大きく貢献したG・ケナンもこの部局に属していました。インドネシア大使を終えて帰任されたばかりで、学院長となられたわけです。インドネシア語が良くできる人でした。後々G・W・ブッシュ大統領の時代に国防次官となり、「ネオコン」の代表的論客となり、その後世銀の総裁となった方です。ただ、着任3か月にして女性問題で退任を余儀なくされたことはすでに周知のことと思います。でも、とっても律義で、優しく、幅のある、すごい切れ者という印象を持ちました。それから、もう一人、初代のブッシュ大統領の国防次官補代理でありアジア太平洋担当だったK・ジャクソン教授（UCバークレー校）と非常に親しくなりました。しばしば彼のペンタゴンのオフィスにお邪魔して、アメリカの東アジア政策、東南アジア政策について質問攻めにしたことを覚えています。彼の研究テーマはナショナリズムとコミュニケーションのかかわりで、K・ドイッチェとの共著があります。なんと、この本は本郷での大学院の授業でテキストとして使われたものでした。そのことを話したら、私が当時取り組んでいた東南アジアの権威主義支配と民主化の可能性の研究に興味を覚えたらしく、またモナッシュ大学の先輩

であったH・クラウチ博士、マラヤ大学のS・レヨン博士と旧知であるということがわかり、「世界は小さい」と話し合ったものでした。

こうした中で、留学2年目になって降ってわいたように興味ある仕事が舞い込みました。1990年と言えば1960から30年、つまりアメリカの情報公開法によって30年間の非公開時期が解け、公開されることになる年でした。それはNHKが特別番組で「60年安保」の特集を組むので協力をしてほしいといわれたことに端を発します。ちょうどそのころ、1960年代半ばにおける東南アジアの強権政治の登場について、特にベトナム戦争が激しさを増している一方で、なぜアメリカと距離を置くような政権が次々に登場したのだろうか疑問に思っていました。その一つの原因はベトナム戦争だと思っていました。つまり多くの他の東南アジア諸国はアメリカのベトナム政策に「巻き込まれる」ことを恐れていたからだと考えていました。しかし、それだけではなく、何かもっと大きな力、つまり植民地支配体制が終わり、独立後の建国の父たちの「自由な時代」が終わり、先に述べたような権威主義支配の時代が到来するようになった何か構造的な変化があったのではないかと思い、アメリカの外交文書を調べ始めたところでした。そして公文書館で膨大な「東南アジア条約機構ファイル」を見つけ、読み始めたところだったのです。手島龍一というNHKの記者が来て、番組担当の川良浩和という方を連れてこられました。偶然ですが、対日関係の重要書類のコピーが先のファイルに添付されていたので、60年安保改定交渉についても少し読んでいました。これに協力するようになりました。資料検索は国務省関係のみならず、国防総省、CIA、統合参謀本部、ホワイトハウス、さらにはハワイの太平洋司令部資料（主として海軍関係）にまで及びました。モナッシュ大で学んだ公文書調査の手法が役に立ちました。これは後に「安保はこうして改定された」という番組となり、新聞協会賞受賞の対象となりました。それはともかく、その際に蒐集した資料は2万頁を超えますが、そのコピーの一部はNHK資料館、もう一つ、つまりオリジナルのコピーは全て法政大学現代法研究所に寄贈しました。

民主化研究

そのころの私の関心は、すでに述べましたが、ラテンアメリカでなく東南アジアでしたが、権威主義からどう脱却していくのだろうかという点にありました。当時のアメリカでも盛んで、とりわけラテンアメリカ諸国のそれは、新たに市場経済を導入した東ヨーロッパの民主化研究と双璧をなしていました。恐れらく SAIS では前者の方が多かったと思います。シュミッター、ステパン、オドネル、コリアーといったラテンアメリカ研究で一時代を作った方々が途切れることなく SAIS を訪問され、講演会を開いておりました。比較研究をしてみたいと思わなくても、自然にそういう目で見えるようになっていったように思います。ただ、そうした大型の比較研究ではなく、もっと小型で、東南アジアの中の比較研究に強い関心を持つようになったと思います。残念ながら、SAIS にはこうした東南アジアの研究者はほとんどおりませんでしたし、コーネル大学、エール大学、中西部のミシガン大学、さらには西海岸の UC バークレー校、ワシントン州立大学など極限られた大学にしか東南アジア研究者はいなかったように思います。インドネシアとマレーシアに行ったことはあっても、フィリピンやタイ、さらにはベトナムについては限られた経験しかありませんでしたから、小型の比較研究には一層興味を持つようになりました。そうしたこともあって、以前から平和研究で知り合った東南アジアの研究者との交流にもっと強く関心を持つようになりました。

こうした機会は意外に早く来ました。その一人はフィリピン大学第三世界研究センターのランドルフ・ダビット教授でした。彼の紹介でフィリピン大学と国連大が中堅官僚への短期研修プログラム（三カ月）を引き受け、授業をすることになりました。そして、その期間を利用して、彼を中心とするフィリピンの民主化研究者との意見交換をさせてもらいました。結局、そこから三つのこ

とをやろうと。一つは、その、次の時代、権威主義の次の時代の政治の担い手って誰なのだろうか。その担い手は、どういう過去で生まれてくるんだろうか。そしてその結果、仮に民主化が起こった場合に、どういう政治が、そこで行われるのかということに、関心が移りました。

では、それなりに、つまり現段階で結論を述べてみたいと思います、私の仮説は、欧米の地域研究に多い傾向かも知れませんが、新たな権力の登場の背景には、文化とかイデオロギーの変容よりも、例えば経済変動とか、社会変動があり、そしてそこから都市中間層が生まれてくるまさに複合的な変動が新しい権力を生み出す背景であるといえると思います。下部構造は上部構造を規定する、でしょうか。しかし、これに対して、社会変動があれば必ず政治変動起こるのか、という疑問が投げかけられます。日本の研究者、特に思想史研究の専門家からこうした問題提起はよくされる傾向にあると思います。それだけではなく、いわば「計量政治学」とは言わないまでもそれを試みられた立教大学の高島通敏先生は、御存知のように選挙予測から地方政治の研究に至るまで、計算通りいかない政治の複雑な仕組みについて造詣の深い先生で、政治変動は単線的でないという批判をくださったことがありました。こうした挑戦を受けて、政治変動の研究には複線、複々線型のアプローチが求められていると思うようになりました。最近、S・リップツキーとL・ウェイ編の『競争力のある権威主義支配体制 (Competitive Authoritarianism)』で、何故権威主義体制は持続力を持ったか、冷戦が終わったにも関わらず崩壊しないのか、産業社会が形成され都市中間層が出てきたのになぜ倒れないのか、についての比較研究をしています。例えば、マレーシアのマハティール首相が言う「手続き民主主義」は民主主義かと問いを發し、一見手続き的には民主的に見えても、権力の仕組みや組織形態（特に政党または政党連合）は極めて権威主義的で、こうした一種の「ハイブリッド」型の権威主義支配体制は生き残るという説明をしています。ただそれは、私の見方ですが、やや長い目で見れば権力外からの民主化運動と権力内の内なる民主化の要請によって「自ら民主化を遂げる」あるいはその

「ふりをする」以外に生き残れない。結局時間幅をどれだけとるかによると思います。

もう一つの仮説は権力の担い手に関するものです。例えば、過去の権威主義支配体制で誰がエリートだったか、担い手だったかについては、非常にはっきりしています。インドネシアでいうと、軍、高級官僚。高級官僚＝翼賛政党的リーダーです。要翼賛政党とは、インドネシアでいえば、機能集団、つまり官僚、組合（主に御用組合）、業界といった縦割りの団体のリーダーのいわば総称です。このモデルは、日本の翼賛支配体制です。ところで、より正確に言えば体制翼賛会の時代よりもっと戦後のコーポラティズムに近い。先ほど触れた組合でいえば、インドネシアの組合は植民地時代以来の産業別組合でしたが、日本の企業別組合の在り方が導入され、政、労、資が協力しあう形をとったものを指します。業界、より抽象的には資本、についても、ラテンアメリカの場合と似ていて、国家資本、民族資本、国際資本の「三結合」を指します。インドネシアの場合はより明確です。つまり、民族資本が脆弱なため、国家資本と外国資本の結合が基本となります。その結合に欠かせないのが華僑資本です。そして華僑資本はしばしば国家資本と深く結びついているのが現実です。「アリ・ババビジネス」といわれる方式です。「アリ」というインドネシア人、つまり国家を支える軍人や官僚、「ババ」というのは現地生まれの華僑のことです。こう言った権力の構成は、急速に変化しています。殊に、一面的であれ民主化の受容に従い、もう一つ大きな変化にさらされているからです。それは、中央集権体制が急速に地方分権に変わっていることに関連します。この何故分権が進んでいるのか、まだ十分に議論されていないのですけれども、中央の軍人や官僚に代わって地方の政治エリート、つまり政治家（多くは地方政府の高官や企業人）が新たな権力の構成員となりつつあります。現にインドネシアの大統領、ジョコ・ウィドド（略称ジョコウィ）は、中部ジャワの名門大学ガジャマダ大学で林学を修学、木材産業、特に家具製造の中小企業経営者から身を起こし、ソロの市長、ジャカルタの州知事、そして大統領になるという稀有な

経歴の持ち主ですが、彼の「右腕」と呼ばれる補佐官はまさに華僑です（アリ・ババの政治版）。ただ、こうした変化は、やがて全国規模での地方分権化、規制緩和、民間化（民活化）を誘発する可能性が高く、権力の構成を変動させられると思われまふ。結局、インドネシアだけではなく、ほとんどの東南アジアの政治における民主化は、地元利益の確保とその分配が争点として最も大事になりつつあることを物語っていると思ひます。それは、軍部支配とか翼賛政党による独裁体制とかが登場しにくい土壌を形成してはいますが、利益誘導型の政治が横行し、政治に対する不信感を増殖させる可能性も高くなっていると思われまふ。「スハルト時代の方が安定しては良かった」といった回顧主義的の見方が登場すらしているのは珍しくありません。

最後に、少しだけ自省も含めて地域研究の限界について触れておきたいと思ひます。先に触れたS・リプツキー等の作品に典型ですが、欧米諸国との関わり力の強さや幅の広さが途上国や新興経済発展諸国（東欧）における民主化の成否に深くかかわるといふ仮説への疑問です。欧米との関わりが民主化を促進する最も大きいファクターの一つとまで言われると、かなりの抵抗を感じまふ。何度も申しましたように、外部ファクターより内部ファクターの重要性を主張し続けてきた立場からすると、見過ごせまふ。確かに、民主化の様々な過程で欧米との関わりが大きい役割を果たすことはいふまでもないのですが、やや欧米偏重ではないかと思ひます。二つ目に、もう一つ「リンケージ」と彼が言っている対外関係がもっている構造的な関係、例えば産業的關係、投資的關係、貿易的關係、それから学閥的關係、の重要性についての仮説についてです。ラテンアメリカの大蔵大臣にはハーバード大学経済学部卒業の人が圧倒的に多いといわれ、タイでは伝統的に慶応大学の経済学部出身の人が圧倒的に強い。また一時期のインドネシアでは「バークレーマフィア」とまで言われるほどUCバークレー校の経済学部卒業者が有力だったことがありました。しかし、それが民主化の動向を左右するファクターかという疑問です。三つ目に、権力を支える制度の強靱性という点ですが、政党が強い決定力を持っているとか、あ

るいは官庁が強い力を持っていることと同義であるとする、むしろ民主化を阻害するファクターとして作動するのではないかと思います。むしろ、様々な政治団体が離散集合しても政治制度そのものが民主化を支える、例えば三権分立が維持されたり、人種対立が激しくても個人の人権が保障されたり、さらには先に触れた権力の地方分権化、規制緩和、さらには民活化が進むといった「主権在民化」が進むといったことがより重要なファクターではないかと思えます。最後に、友人であるブザン教授が言うように、何が成熟段階かは難しい問題ですが、国民国家が成熟段階に達すると安全保障といった主権国家が独占してきた領域に、国家を超えたプロセスとか、国家を超えた制度が構築され始め、一国主義的な「強い政府への要請」ということ自体が政治的意味を失い始める。「強い政府」はまさに権威主義支配体制の正当化の源泉であったし、民主化はその根元を掘り崩す変化であるというのが私の主張です。従って、むしろ研究対象とすべきは、民主化を求める中間層の登場が遅れたり、あるいは不十分であったり、さらには「中進国の罠」に陥って中間層の形成そのものが頓挫している原因を究明することではないかと思えます。さらに付け加えれば、権力による分配が中間層の成長に役立っていないどころか、社会・経済格差を拡大させている仕組みを解明することと言い換えられると思えます。

最後に、付け足しで申し訳ないのですが、教育面について一言触れたいと思えます。これまで繰り返し述べてきました研究と教育の関連でいえば、地域研究が直面している問題は地域研究だけでは解き明かせなくなってきているという実感です。国際政治は解き明かせるかといわれると、やはり同じ答え、国際政治学だけでそれを解き明かせない。従来からも問われ続けてきましたが、地域研究と国際政治研究の二つをどう組み合わせ、深く、そして広く政治変動を観察し続けることができるのか、それこそが残された道かなと思いました。こうした研究上の発見を土台に、二部の廃止とロースクールの設置を機に法学部全体の改組転換が議論された時期に、新たな学科を構想しました。国際政治学科の構想です。そして、その際に最初に考えたのは上記に触れたこの二つの

要請にこたえるための設計でした。国際政治学科のカリキュラムの構成はそうして設計したわけです。より具体的には、アジア政治とグローバル政治という二つのカリキュラム群を中心として据えて、それぞれがある程度一貫したカリキュラムとなるだけでなく、しかも、両方を系統的に学ぶことができるようにしようと考えたのです。欲張った構想といえると思います。その延長線上に、語学の集中的な学習、英語での国際政治学の習得、そのための発想の転換をする機会としてのオックスフォード大学への短期留学、ゼミの必修科目化などが組み込まれました。今後は、こうした設定が効果的かどうか、自由に検討をしていただき、柔軟に改良を重ねるということをしていただければと願っています。